

改めて最も基本的な質問—イエスキリストとはどんな方ですか

イエスキリストとなられた方は実際のところ、どんな方なのでしょうか。

また私たちは真の神であられる創造主とどのような立場にあるものとして彼を見るべきなのでしょうか。この前の論議の中で神殿に向かって祈るという崇拝の方式がソロモン以後確立されたこと。また神殿の持つ権能を引き継がれたイエスキリストがその崇拝の方式を引き継がれていること。それ故私たちはどこにしようともイエスキリストの名を通すことによって「真の神」に近づくことができるようになったのだと言うことを知ることができました。

(別資料「わたしを通してでなければ・・・」とはどういう意味でしょうか)をご覧ください)

このことはキリストがサマリヤの女に向かって語られた次の聖句によっても確証されます。

(ヨハネ 4:21 - 23) …あなた方が、この山でも、エルサレムでもないところで父を崇拝する時が来ようとしています。・・・救いはユダヤ人から起こるからです。とはいえ、真の崇拝者が霊と真理をもって父を崇拝する時が来ようとしています。それは今なのです。実際、父は、ご自分をそのように崇拝する者たちを求めておられるのです。

私たちは、聖書の記録から「父なる神」をイエスキリストに向かって礼拝する。つまりイエスキリストの名を通して真の神を崇拝する、と言う崇拝の仕方を学ぶことができます。

ここで見方を変えるなら私たちはイエスキリストを受け入れたことによって「イエスキリストの名を通す」と言うことを守るだけで実に大きな自由を手に入れることができます。

つまり私たちは特定の崇拝をするための礼拝堂のようなものを全く必要しなくなったと言うことなのです。

このことを理解するとき、次に聖句に示される約束は実に意義深いものとなることでしょう。

(マタイ 18:20) 二人か三人がわたしの名において共に集まっているところには、わたしもその中にいるからです」。

つまりその場所が神殿また礼拝堂であり、まったくふさわしい真の崇拝の場所であることを確証していただいたことになるからなのです。

このような真理を初期のクリスチャンたちはよく理解していたことが記録から分かります。彼らは礼拝堂も祭壇も持とうとしませんでした。

しかし彼らはそうすることによって実際には崇拜の自由を確立していたことになるのです。

従ってもはや、というか、とうに2000年前に「崇拜の中心地」というような概念はクリスチャンの持つものではなくなりました。崇拜のための特定の場所という考えは、それはまだ、エルサレムの神殿があった時代のもので、未だにそうした感覚で捉えているとするならば、「霊と真理」ならぬ「物質と感違い」によって神を崇拜している人々の感覚であると言えます。

*** 塔 08 2 / 1 21 ページ ***

近年、エホバの証人は世界中の数多くの国や地域で、王国会館と呼ばれる崇拜のための場所を幾千も建設してきました。

*** 塔 05 12 / 1 19 ページ ***

どんな建物も神を入れることはできないものの、神殿はエホバの崇拜の中心地となりました。今日、エホバの証人の王国会館は、それぞれの土地における真の崇拜の中心地となっています。

さて、話を戻しましょう。キリストの立場についてですが、キリストの神性について、次に聖句は何を示しているか、考えながら読んでみてください。

(ヨハネ 1:14) …言葉は肉体となってわたしたちの間に宿り、わたしたちはその栄光、父の独り子が持つような栄光を目にしたのである。…

(ヨハネ 16:15) …父が持つておられるものは皆わたしのものです…

(ヨハネ 1:18) …いまだ神を見た人はいない。父に対してその懐[の位置]にいる独り子の神こそ、彼について説明したのである…

(ヨハネ 3:18) …神の独り子の名に信仰を働かせ…

(ヨハネ 10:30) …わたしと父とは一つです…

(ヨハネ 14:9) …わたしを見た者は、父を[も]見たのです…

(ヘブライ 1:3) 彼は[神の]栄光の反映、またその存在そのものの厳密な描出であり、その力の言葉によってすべてのものを支えておられま

これらを踏まえた上で、神とみ子との具体的な関係を改めて考察してみることにしましょう。

天的なこと、霊の存在に関して、人間に取ってイメージしやすいように、様々な比喩的な表現が使われています。

神に文字通りの顔、目、耳などはありません。み使いにも文字通りの翼はありません。霊者の会話も、声帯がないので、文字通り音声で話しているものでもありません。

また、その関係についても、父、子、妻、夫、母、花嫁などの表現も、肉の人間がその関係や果たす役割などをとらえやすいように、そうした表現が用いられています

その中でも、とりわけ重要で分かりやすいのが、「父」また「子」という表現でしょう。

み使いは「神の子たち」です。イエスも「子」のひとりですが、「独り子」と表現されています。

「独り子」(μονογενήςモノゲノス [ギ])は唯一という意味です。分かりやすく言えば「一人っ子」他に兄弟が誰もいない子供のことです。

何故イエスは、他に大勢の「子たち」がいるのに「ひとりっ子なんですか？

それは、存在するようになったプロセスが他とまったく異なるということです。つまり創造主が直接、存在させた唯一の被造物であるから、とということでしょう。

(箴言 8:22-25) エホバご自身が、その道の初めとして、昔のその偉業の最初 [として] わたしを産み出された。わたしは定めのない時から立てられた。始めから、地よりも前の時代からである。水の深みもなかったときに、わたしは産みの苦しみを伴うかのようにして生み出された。それは水のみなざる泉もなかったときである。山々が固く定められる前に、もろもろの丘に先立って、わたしは産みの苦しみを伴うかのようにして生み出された。

(ヨハネ 1:1 - 4) …言葉は神であった。この方は初めに神と共にいた。すべてのものは彼を通して存在するようになり、彼を離れて存在するようになったものは一つもない。彼によって存在するようになったものは命であり、命は人の光であった…

(ヨハネ 1:3) …すべてのものは彼を通して存在するようになり、彼を離れて存在するようになったものは一つもない。…

(コロサイ 1:15 - 17) …彼は見えない神の像であって、全創造物の初子です。『なぜなら、[他の]すべてのものは、天においても地においても、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ政府であれ権威であれ、彼によって創造されたからです。[他の]すべてのものは彼を通して、また彼のために創造されているのです。』また、彼は[他の]すべてのものより前からあり、[他の]すべてのものは彼によって存在するようになりました…

(コリント第一 8:6) …わたしたちには父なるただひとりの神がおられ、この方からすべてのものが出ており、わたしたちはこの方のためにあるのです。また、ひとりの主、イエス・キリストがおられ、この方を通してすべてのものがあり、わたしたちもこの方を通してあるのです。

コロサイでは「全創造物の初子」という表現ですが、箴言の表現では「産み出された」（新世）「生み出されていた」（新共同）とあります。

他の理知的な被造物はどここの記述でも「造られた」と表現されます。

存在という観点から言えば、全ての存在は「造物主」「か「被造物」かのどちらかなので、創造主以外の存在はすべて「被造物」に違いありませんが、厳密に言えば、例えばわたしは神から造られたのではなく、親から「産まれた」のであり、「造られた」と「産まれた」と言う表現は同義語ではありません。

「み子」は「造られた」というより、エホバから唯一「産まれた」存在であるがゆえに「独り子」と呼ばれるべき方なのかもしれません。

さて、すべてのものは「み子」キリストによって存在するようになったということは、先に示したように、人間関係での表現から言えば、み子の役割、立場は、比喩的に「母」と言うのが最も適切でしょう。

これまで「神」という概念は常に唯一というものでしたから、先に挙げたようなキリストの神性を示していると思える聖句は常に混乱させるものでした。

三位一体論も然り、そして、無理にキリストの神性を否定しよとする論議も同様に、哲学的な混乱を引き起こします。

しかし、霊の存在も人間関係の語彙で表現し得ることを考えると、父と母がいてそこから子供たちが産まれて家族となる。という明快なパターンです。

さて子供たちにとって父は一人、母もひとりですが、「親」は二人です。

言おうとしていることが分かりますか。

聖書的な表現方法を使って言うと、「父」によって「母」を通して生み出された子供たちには、「親」は二人いるのが当たり前で、そして健全な理想的な家族形態です。

つまり子供には「両親」がいますし、必要なのです。

同様に、み使いを含め、「神の子供たち」である理知的被造物には「両神」が存在するというのが、聖書を素直に読み、つぶさに調べてみて理解できる、最も聖書的な結論と言えらると思います。

人間の両親についての記述として、次に聖句の表現に注目してみてください。

ご自分の象[かたち]に似せて「人を創造された方は、これを初めから男性と女性に造り、『このゆえに、人は父と母を離れて自分の妻に堅く付き、二人は一体となる』と言われたのです。したがって、彼らはもはや二つではなく、一体です。(マタイ 19:4 - 6)

人間が創造されて以来、人間の家族の特別な関係は父と母です。

同様に、神とみ子の結びつきは確かに極めて特別であり、神とみ子は一体であるという表現は聖書的に的確であるといえます。キリストご自身の言葉として「父とわたしはひとつ」と述べておられるのですから、神とみ子は一体と表現していけない理由は全くありません。

イエスは神性を持たれるのかとの問いに対しては『ハイと肯定の答えを出すべきだと思えます。しかしイエスは慎み深く謙遜な方であるため「父と同等の權威を求めず真の神に栄光を帰しておられるのです」。

クリスチャンもその手本に見習うべきですが、キリストの神性を否定する理由は何も無いのではありませんか。

では、キリストが「母」のような存在であるとしたら、これまで、「ものみの塔」が述べてきた、「み使いたち」が神の「妻」であると言う見解はどうなるのでしょうか？

み使いたちが、神の「妻」あるいは人類の「母」と呼ばれるような言及は聖書中に 1カ所もありません。またそれを示唆するような記述さえまったくありません。

従ってみ使いからなる天の組織が女の胤の「女」に当たるという説明も、まったく聖書的な根拠のないものです。

そもそも、アブラハムの胤、その主要な方はイエスキリストであり、真のクリスチャンもそれに含まれますが、キリストを通して存在するようになったみ使いたちが、どうしてキリストを胤、子供として産み出すことができるのでしょうか。同様に、どのようにみ使い立ちは、真のクリスチャンを産み出すのでしょうか？

彼らは確かに助けになります。彼らの「母」と言える役割は何ら果たすことはありません。

さて、では、女の胤の「女」とは何でしょうか

(ガラテア 4:22 - 26)「アブラハムは二人の子を得たと書いてあります。ひとは下女により、ひとは自由の女によってです。しかし、下女による子は実際には肉の方法で生まれ、自由の女による子は約束によって生まれ]ました。これらの事は象徴的な劇となっています。この女たちは二つの契約を表わしているからです。一方はシナイ山から出ていて、奴隷となる子供たちを生み出すもの、すなわちハガルです。そこで、このハガルは、アラビアにある山シナイを表わし、今日のエルサレムに当たります。彼女は自分の子供たちと共に奴隷の身分にあるからです。それに対し、上なるエルサレムは自由であって、それがわたしたちの母です。」

この記述は反意語で対になっています。

「自由の女」 — 「下女」

「サラ」 — 「ハガル」

「自由」 — 「奴隷身分」

「上なるエルサレム」 — 「今日のエルサレム」

さて注目すべきなのは「今日のエルサレムに当たります」という表現です。

もしこれが「地（上）のエルサレムです」となっているなら、「上なるエルサレムは」天に存在すると理解すべきですが、しかし、「上なる」とは何かを考える際、その反意語として用いている「今日の」という表現から、パウロがどのような思考を働かせて「上なる」という表現を使ったかが読み取れるということです。

この表現は、エルサレムの「場所」を問題にしているのではなく、「時」もしくは「時代」を問題にしていることがわかります。

「今日のエルサレム」の反意語を挙げるとすれば、「将来のエルサレム」でしょう（過去と言うことはありえないので）

正しく理解するために文脈をよく読むべきというのはこういうことです。

「エルサレム」という都市自体が、終始一環、奴隷身分にあるわけではありません。

1 世紀の時点で、そうした状態に陥っていたということです。

ここで、イエスの語られた「異邦人の定められた時が満ちるまでエルサレムは踏みにじられる」という言葉を思い起こします。

そしてその時が満了するとエルサレムは回復し、神の恵みが再び復活するという約束に基づいています。

従って、パウロがガラテアで引用したイザヤ 54 章の記録からも分かるように真のアブラハムの胤は約束によって産まれるわけですから、胤を産み出すエルサレムは、最終的に回復の約束が成就した時点でのエルサレムと言えます。その時点で胤は復活して王国に入ります「上なる」と訳されるギリシャ語は単に「上」という意味であって、上方、上位のと言うことであり、必ずしも天を指すわけではありません。

実際、天に母を捜しても、天にはエホバとイエスとみ使いしかいませんから、このうちのどれかかという、「母」の役割を果たす対象はみつかりません。

キリストは、胤の一人ですから、母と胤が同一ということはありません。

み使いたちが「母」の役割を果たしたという記述はどこにもありませんし、「女」あるいは「妻」、み使いに対して「夫」と呼ばれるともものは聖書中にありません。

これらの表現は全て、イザヤ 54 章やエレミヤなどの多くの例に見られるように、イスラエル人に対してのみ使われています。

*** 誇 5 章 59 ページ 20 節 *** エホバ神がご自分の選民のことをご自身の妻また女と言って、彼らにこう言われたとおりです。「主は仰せられる。背信の子供らよ、帰れ。わたしがあなたがたの夫になるからだ」。(エレミヤ 3:14; 31:31)

み使いたちから出た胤と言え、**「あるべき所を捨てたみ使い」**である、サタンと蛇の「胤」しかありません。

この「上の」という表現は、人間の意志、肉的な方法、という事柄に対応したもので、約束による神の霊的な方法によるものが、胤の母であるということです。

「より高い次元の」ものという意味合いであろうと思われま。そして具体的な意味は「約束が成就する将来」という意味で使われていると考えることができます。